【研究報告】

小児科外来実習における看護学生の経験に関する研究

志賀加奈子*　前田陽子*

【要　　旨】

本研究は、小児科外来実習において、看護学生がどのような経験をしているのか明らかにすることを目的として行った。研究参加者は、20代前半の看護大学４年生８名であった。半構成的面接法を用いてデータ収集を行い、録音した面接内容から逐語録を作成した。逐語録を繰り返し精読して意味のまとまりごとに分けてコード化し、共通性と相違性を比較しながらカテゴリー化した。その結果、学生は、『外来実習はイメージし難くて戸惑う』、『あっという間の関わりに追い付けなくて焦る』、『予定通りにいかなくて不安になる』、『関わりやすさの違いに一喜一憂する』、『納得のいく準備学習ができて達成感を得る』、『納得のいく準備学習ができず不完全燃焼に陥る』という経験をしていることがわかった。小児科外来実習は、初学者である学生にとって特有の難しさがあると考えられるため、学生が学びやすい教授法を検討する必要がある。

【キーワード】外来実習、小児科外来、看護学生

Ⅰ．はじめに

近年､在院日数の短縮化に伴って通院患者は増加･重症化しており、外来における看護ニーズは大きくなっている。また、小児看護学では、少子化に伴う入院患児の減少や小児病棟の閉鎖等によって、病棟のみでは学生の実習機会を確保することが難しい状況も増えてきた。したがって、看護学生が外来において実習を行う意義はますます大きくなると考えられる。実際に、看護基礎教育においても、多くの看護学領域で外来実習を取り入れており、学習の成果として、対象理解や援助方法の理解等が数多く報告されていることがわかっている[1)]。

しかし、学習の成果に関心が集まる一方で、看護学生が病棟実習とは異なる外来実習において、どのような経験を通して、学習の成果を得ているのか明らかではない。また、看護教育で長く用いられてきた教授法を示す代表的文献[2)]も、病棟実習を前提としており、外来実習に関する教授法は示されていない。外来実習における学生の経験を明らかにすることは、教授法にも示唆を得られる可能性がある。

そこで本研究は、小児科外来実習において学生がどのような経験をしているのか明らかにすることを目的として行った。

Ⅱ．研究方法

本研究は、質的帰納的研究デザインとした。インタビューガイドに基づいて１名の研究参加者につき１回の半構成的面接を行い、研究参加者の同意を得てICレコーダーに録音した。インタビューを行う場所および日時は、研究参加者の希望に基づいて、プライバシーを確保できる場所を選定した。研究参加者には、小児科外来実習はどのような経験であったのか、印象深い出来事やそのときの気持ちや考え、行動について自由に語ってもらった。分析は、録音したデータから逐語録を作成し、繰り返し精読した上で、意味のまとまりごとに分けてコード化し、コードの共通性と相違性を比較しながらカテゴリー化した。また、真実性を担保するために質的研究の経験がある看護研究者５名と小児科に勤務する看護師２名による分析会において検討した。データ収集の

＊日本赤十字北海道看護大学

（2017.11.30受理）

期間は、平成23年11月から平成24年４月であった。

Ⅲ．倫理的配慮

本研究は日本赤十字北海道看護大学研究倫理委員会の承認を受けて行った（承認番号23-122）。本研究への参加を呼びかけるポスターを掲示板に張り出し、臨地実習の単位を修得済みの学生を募った。関心を示してくれた学生に研究者が研究の趣旨と方法等について書面および口頭で説明した。その後、研究参加者の都合の良いときに書面によって同意を得た。説明の内容は、研究への参加は自由意思であること、辞退しても成績などへの不利益は一切ないこと、答えたくない質問は答えなくても良いこと、いつでも同意を撤回できること、データは鍵のかかる場所に保管し研究終了後に研究者が責任を持って破棄すること、研究目的以外には使用しないこと、研究結果を公表する際は個人が特定されないよう匿名化すること等であった。

Ⅳ．結　　果

研究参加者は、20代前半のＡ大学４年生８名で、インタビューの時間は平均75分であった。Ａ大学小児看護学実習は、総合病院の小児科外来実習において、一般外来、専門外来、予防接種外来、乳児健診を１日に５－６名の学生がローテーションし、１名の学生につき５日間行われていた。実習内容が専門外来、予防接種外来、乳児健診の場合は、前日に対象事例の紹介を受けていた。一般外来の場合、学生は希望する患児の年齢や症状について、臨床指導者にあらかじめ伝えて患児を選定してもらっていた。いずれの場合も、子どもが来院すると看護師による問診の後に、学生は親子の受診が終了し見送るまで、情報収集したり、コミュニケーションを図ったり、援助の一部を行ったりしていた。

分析の結果、『外来実習はイメージし難くて戸惑う』、『あっという間の関わりに追い付けなくて焦る』、『予定通りにいかなくて不安になる』、『関わりやすさの違いに一喜一憂する』、『納得のいく準備学習ができて達成感を得る』、『納得のいく準備学習ができず不完全燃焼に陥る』という６つのカテゴリーを抽出した（表参照）。以下にカテゴリー名は『』、生データは「」を用いて説明する。

１）『外来実習はイメージし難くて戸惑う』

学生にとって、外来実習はオリエンテーション等の説明を受けても準備学習をしたりしていても、イメージしにくく戸惑いを感じるものであった。その背景要因について、学生は、それまでに受けた教育や実習も病棟をメインとして学習してきており、外来について学んだり、実習したりすることは少なかったからであると考えていた。

研究参加者は、「外来のイメージっていうのがつきにくくて…」、「病棟っていうイメージが…。実習イコール病棟実習っていうのが強いと思うんですよね。」と、イメージがつかず戸惑う経験を語った。

２）『あっという間の関わりに追い付けなくて焦る』

いざ始まってみると、学生にとって外来実習は、あっという間の関わりに追い付けなくて焦りを感じるものであった。その背景要因について、学生は、外来では病棟と同じように毎日同じ子どもと関わることはできず、毎日違う子どもと関わらざるを得ない。さらに、その関わる時間は短く、しかもすぐに帰宅してしまうので、援助の実践や判断を翌日に持ち越すこともできないからであると考えていた。

研究参加者の学生は、「外来はホント、その日その日。１日だけしか患者さんと関われないので、その中でいかに状態を把握して、じゃあどんなことが必要で…判断しないといけない流れの速い場所だなって…」と、焦りを感じながら実習する経験を語った。

３）『予定通りにいかなくて不安になる』

学生にとって、外来実習は、あらかじめ指導者へ希望しておいた通りの患児が必ず受診するとは限らない現実に直面し、予定していた通りにいくかどうかも見通せないまま、来院する子どもを待ち続けるという不安が募るものであった。その背景要因について、学生は、子どもたちが罹患しやすい疾患は時期によって様々であること、さらに、予定通りに進めることができた仲間の学生がどんどん関わりを終えていく姿を目の当たりにしながら待たなくてはならず、不安を感じると考えていた。

研究参加者は、「今日受け持てるのかなっていうソワソワ感というか不安というのがありましたね」、「思った通りの患者さんがこなくて困ったなって･･･」と、不安を感じながら実習する経験について語った。

４）『関わりやすさの違いに一喜一憂する』

学生にとって、外来実習は、その日に出会った親子との関わりやすさに喜んだり、関わりにくさに困

ったり、一喜一憂するものであった。学生にとっての関わりやすさや関わりにくさとは、子どもの母親が学生と話をしてくれるかどうかで左右され、子どもに元気がないと母親は学生と話す余裕を失うと考えていた。さらに学生は母親に余裕がないと気まずくなって一緒にいることも辛くなっていた。逆に、子どもに元気があり、母親が学生へよく話をしてくれると、情報収集が進みアセスメントしやすくなると考え喜びを感じていた。

研究参加者は、「その後が続かない会話のお母さんだったので、それが一番辛かったです…」「(子どもの母親が) いっぱいお話しして下さったら、よしっ！って思いますね。」と、関わりやすさの違いに一喜一憂する経験を語った。

5)『納得のいく準備学習ができず不完全燃焼に陥る』

学生にとって、外来実習は、希望通りの患児が受診にくるとは限らないため見通しが立たず、準備学習の範囲が広くなってしまい、納得のいく準備に至らないことがあった。それに伴って、せっかく学んだことにも、これでよかったのか確信が持てなかったり、自分の力不足を申し訳なく感じたりして、不完全燃焼に陥るものであった。

研究参加者は、「(外来実習は) 漠然としている面があって…。明日外来だ！何勉強しよう？みたいな…。やることがいっぱいあり過ぎて、どれから手をつけたらいいんだろうって気持ちになってましたね。」、「(実習はしたものの) これで大丈夫だと思う、っていうことはやっぱり外来では少なかったので。」と、準備学習ができず不完全燃焼に陥る経験について語った。

6)『納得のいく準備学習ができて達成感を得る』

一方で、学生は、準備学習に注いだ時間とエネルギーの成果に手答えを感じることで、達成感を持ったり、一層張り切って実習に取り組んだりしていた。事前に心の準備だけでなく、知識を補充して、実践につながる準備学習ができると納得ができ、実習にも納得できると考えていた。

研究参加者は、「(外来実習は) 大変できついところはあるんですけど、それ分が返ってくるっていう感じ。」、「じゃあ、次はこうしたらいいのかなっていうふうに、そのときに頭の中でちゃんと考えながら行動できたときは、(できる) その範囲が広くなったのかなって思いました。」と、納得のいく準備学習ができて達成感を得る経験について語った。

V. 考　　察

本研究の結果、小児科外来実習における看護学生の経験を示す6つのカテゴリーが明らかになった。これらのカテゴリーから、初学者である看護学生にとって、小児科外来実習は、特有の難しさがあること、看護教育上の課題があることが考えられた。この2点について以下に考察する。

1. 小児科外来実習における特有の難しさ

先行研究において、小児科外来は「病棟に比べ子どもと家族に関わる時間が非常に短いため、即座にそのニードを見極め、援助に繋げなければならない[3]」という特徴があること、小児科外来の看護は病棟よりも初学者には難しい可能性もある[4]ことが指摘されている。本研究においても、学生はあっという間の関わりに焦りを感じていたことから、初学者である学生にとって、親子との関わりが短時間である小児科外来実習は、先行研究と同様に難しいものであると考えられる。

また、先行研究では、小児病棟実習において、学生が困難を乗り越える対処法には、患児と根気強く関わりを続けて関係を築くという「根気強く継続的な関わり」があることが報告されている[5]。しかし、本研究の結果、毎日違う子どもと関わり、しかもその日のうちに子どもが帰宅してしまうことに学生は追いつけなくて焦りを感じていることがわかった。つまり、小児科外来実習では、短時間で子どもは帰宅してしまうこと、毎日同じ子どもと関わることはできないことから、学生が病棟実習と同じ対処方法を用いることは難しい。そのため、学生は対処法不足に陥り、困難感が大きくなる可能性が考えられる。

さらに、本研究の場合は、学生は納得のいく準備学習ができれば達成感を得られるが、納得のいく準備学習ができなければ不完全燃焼に陥っていたこともわかった。この要因として、一般外来では急性期看護、専門外来では慢性期看護、予防接種外来や乳幼児健診では健康な子どもを対象とした予防的な看護という多様性があるため準備学習が追いつかないこと、また、学生が準備学習した知識や技術に当てはまる親子が必ずしも来院するとは限らないため、準備学習はしたものの予定していた通りの親子を受け持てないことで、学生が対処しきれなくなることが考えられる。このような準備学習の難しさも学生の困難感を大きくする可能性が考えられる。

２．看護教育上の課題

一方、外来実習は学習の成果があることは数多く報告されている[6)]。特に小児科外来は、急性期や慢性期の看護はもちろん、乳幼児健診や予防接種など、幅広い看護活動が行われており、様々な目的で受診する子どもやその家族と関わることができるため、小児看護を学ぶ場として豊かな可能性を持っている。さらに、少子化の進行によって実習機会の確保がますます困難になることが予測され、外来において学生が学ぶ機会を整えることの重要性もますます大きくなると考えられる。

本研究の結果、関わりが短時間である難しさや準備学習の難しさなど、小児科外来実習における特有の難しさがあった。したがって、初学者である学生が外来で実習する場合には、これらの小児科外来実習に特有の難しさを考慮することが看護教育上の課題であると考えられる。

さらに、本研究の結果、学生はオリエンテーションを受けていても、小児科外来実習はイメージし難くて戸惑う経験をしていた。その要因のひとつとして、学生が「実習イコール病棟実習」と語ったように、学生が受けてきた教育は多くの場合、病棟を中心に行われていることが考えられる。たとえば、看護教育の教授法を示す代表的文献[7)]も、病棟実習を前提としており、外来実習に関する教授法は示されていない。さらに、外来における臨地実習の内容と方法についてレビューした先行研究によると、教授スキルに関する研究が見落とされていることが指摘されている[8)]。つまり、外来実習は多く取り入れられていても、どのように教授するのかノウハウの蓄積は十分ではない現状にあると言える。したがって学生が小児科外来の看護について、学びやすい教授法を検討することが課題であると考えられる。

Ⅵ．おわりに

本研究の結果、小児科外来実習における学生の経験を示す６つのカテゴリーが明らかになった。今後は、さらに外来実習のあり方について検討していく必要がある。本研究は、８名の語りを分析したものであるため、結果の一般化には限界がある。

本研究へ参加して下さった看護学生の方々に心から感謝申し上げます。本研究は、日本小児看護学会第26回学術集会において発表しました。

Ⅶ．引用文献

１）志賀加奈子、前田陽子：外来における臨地実習に関する国内文献レビュー、日本赤十字北海道看護大学紀要、14、29-35、2014
２）杉森みど里、舟島なをみ：看護教育学　第５版、医学書院、2012
３）飯村直子：小児の外来看護に関する国内文献の検討、日本小児看護学会誌、16（１）、53-60、2007
４）宮谷恵、小出扶美子、山本智子、市江和子、高真喜、新村君枝：看護基礎教育の小児看護学実習における外来単独での病院実習の有用性の検討、日本小児看護学会誌、19（２）、25-31、2010
５）西田みゆき、北島靖子：小児看護学実習での学生の困難感のプロセスと学生自身の対処、日本看護研究学会雑誌、28（２）、59-65、2005
６）前掲１）
７）前掲２）
８）前掲１）